

氏名 なか もと こういちろう
 仲 本 康 一 郎
 学位(専攻分野) 博士 (人間・環境学)
 学位記番号 人 博 第 266 号
 学位授与の日付 平成 17 年 3 月 23日
 学位授与の要件 学位規則第 4 条第 1 項該当
 研究科・専攻 人間・環境学研究科人間・環境学専攻
 学位論文題目 認知意味論に基づく属性表現の意味解釈のメカニズム
 ——エージェント指向の意味論の構築へ向けて——

論文調査委員 (主査) 教授 山梨正明 教授 東郷雄二 助教授 河崎 靖

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、認知言語学の枠組みにおける意味論（以下、認知意味論）に基づき、日常言語における日本語の属性表現の意味のメカニズムの解明を試みた実証的研究である。本論文では、特に空間認知、対象知覚、体感、運動感覚、等の身体的な経験を反映する属性表現が考察の対象となっている。全体は6章からなる。

第1章では、基本的に次の三点から、本論文の研究の意義が論じられる。第一に、本論文では、従来の客観主義的な世界観に基づく意味論（特に、語彙意味論、概念意味論、真理条件的意味論）における属性表現の研究の限界を明らかにし、より包括的な意味論の構築を目指す。第二に、認知意味論の理論的な背景をなす経験基盤主義を、生態心理学の知覚・行為観によって基礎づけていく。そして、第三に、発話主体である人間の志向性を考慮した意味論（＝エージェント指向の意味論）を構築していく。

第2章では、認知意味論の理論的立場である経験基盤主義を、生態心理学の知覚・行為観によって基礎づけている。認知意味論は、人間の思考や言語は、主体と外部世界の相互作用に基づくとする経験基盤主義の立場に立っている。本論文では、経験基盤主義の根底にある世界観として、生態心理学におけるアフォーダンスの考え方を適用する。本章では、言葉の意味が、言語主体と外部世界の相互作用に根ざすアフォーダンスを反映する事実を、空間、距離、五感、体感、等の身体的な経験を反映する属性表現の分析によって明らかにしている。

第3章では、認知意味論の下位モデルであるフレーム意味論のモデルに基づいて、属性表現の主観的な意味の体系的な分析を試みている。概念意味論や生成語彙論に代表される従来の意味論の分析では、属性表現の意味は、その表現自体に内在する客観的な性質として記述する試みがなされている。しかし、この線に沿った意味分析では、言語主体の身体的な経験を反映する言葉の主観的な意味の世界を体系的に規定していくことは不可能である。本章では、属性表現の意味に反映される主体と環境の相互作用を規定する枠組みとして、フィルモアのフレーム意味論の分析を属性表現（特に、五感、体感にかかわる属性表現）に適用し、言語主体の身体的な経験を反映する言葉の主観的な意味の解明を試みている。本章ではさらに、主観的な意味を反映する属性表現として力学的な抵抗力にかかわる言語事例を分析し、外部世界を直接的に反映する物理的文脈だけでなく、主体の具体的な知覚の行為や活動の文脈が、属性表現の意味解釈に際し重要な役割をになう点を明らかにしている。また、本章では、空間的な位置関係を表わす属性表現が、主体から独立した客観的な位置関係を表わす表現として機能するのではなく、主体の移動行為や探索活動にかかわる接近可能性にかかわる主観的な意味を反映している事実を明らかにしている。

第4章では、属性という概念を、従来の客観主義の世界観に基づく概念的な対象として分析するのではなく、外部世界と相互作用していく主体の主観的な意味づけを反映する事態の一面として分析する方法を提案している。本章では、まず属性を一時的な状態として分析する手法として、事態の局面というアスペクト概念を導入する。属性表現の場合、動詞のアスペクトと異なり、事態が現実化したかどうかを表わす未然相と已然相という対立が重要な役割をになう。本章ではさらに、

従来のアスペクト研究に欠けていた概念として予期という概念を導入し、外部世界の行為にかかわる探索者としての主体が現在の状況を観察し、今後状況がどう変化するかを予期する存在であることを、行為の可能性、行為の結果、等にかかわる属性表現の分析によって明らかにしている。さらに本章では、この種の属性を表わす言語表現が、外部世界の客観的な事態の単なる一時的な側面でなく、何らかの行為や出来事の結果として主観的に理解される事例を考察し、これらの主観的な解釈を反映する言語主体の痕跡的認知のプロセスを明らかにしている。

第5章では、以上の考察を踏まえ、属性という概念は世界の対象、行為、事態、等を客観的に（あるいは直接的に）反映する概念ではなく、外部世界との相互作用を経験的な基盤とする主体の主観的な評価を反映している点に着目し、この種の主観的な評価の意味解釈にかかわる言語現象を体系的に分析している。属性表現の評価の意味は、辞書の意味として概念化される場合もあるが、実際の言語使用を綿密に観察した場合、評価の意味は、それと共起する副詞等の修飾表現の補助的な指標に反映される事例が大半を占めている。本章では、評価の意味を反映する属性表現の意味が、この種の言語表現と共起する副詞等の修飾表現の補助的な指標を手がかりにして解釈される主観的な認知のメカニズムの一面を、行為の成・否、知覚の快・不快、期待される事態の成立・未成立、等にかかわる言語表現のフレーム分析に基づいて明らかにしている。

第6章では、本論文の総括として、エージェント指向の意味論の構築の可能性と今後の研究の方向性を考察している。エージェント指向の意味論は、環境に対する主体の構えによって、主体を行為者、感覚者、探索者という三つの分散的なエージェントとして規定する。本章では、従来の言語学の意味論の研究に欠けていたエージェントの概念を組みこむ意味モデルの観点から、日常言語の言語理解のモデルの構築に向けての一般的な展望を図っている。

論文審査の結果の要旨

本学位申請論文は、認知意味論の枠組みに基づいて、身体性を反映する日常言語の属性表現の意味のメカニズムの解明を試みた実証的研究である。理論言語学における従来の意味論の研究では、概念意味論や生成語彙論にみられるように、意味分析に際し、言語主体とは独立した抽象的な意味標識による属性規定が試みられている。しかし、これまでの研究では、言語主体と外部世界の相互作用を反映する属性表現の体系的な意味分析は殆どなされていない。本論文の独創的な点は、従来の認知言語学のパラダイムにおける標準的な枠組みとしての認知意味論に、生態心理学の知覚・行為観に基礎を置くアフォーダンスの概念を組み込むことによって、空間、距離、感覚、体感、等の身体的な経験を反映する属性表現の意味のメカニズムの体系的な分析を試みている点にある。

これまでの意味論の研究では、語彙に直接的に反映されると仮定される意味属性を構成要素とする言語表現の字義通りの意味構造の分析が主眼となっている。これに対し、本研究は、従来の語彙レベルに限定されていた意味分析を越え、文レベルにおける言葉の意味解釈のプロセスの解明を試みると同時に、テキスト文脈（ないしは談話文脈）における文相互の含意関係を明らかにしている。文相互の含意関係は、テキスト・談話の意味的（ないしは語用論的）な連結性と一貫性を保証するための関係として重要な役割をになう。本研究は、認知意味論の下位理論であるフレーム意味論に基づき、テキスト・談話の含意関係（特に、これまでの意味論の研究で等閑視されていた行為、事態、等に対する主体の主観的な評価と判断に関わる含意関係）を明らかにしている点に意義がある。本研究で採用しているフレーム意味論は、言語学のみならず、テキスト・談話解析、自動翻訳、科学的レキシコンの研究、等の情報科学の関連分野においても応用されてきている。本研究の属性表現のフレーム分析の研究成果の一部は、これらの関連分野の自然言語処理の研究に新たな知見を提供する。

従来の認知言語学の意味研究では、動詞類や名詞類の言語表現に関する意味変化や意味拡張の研究は広範になされてきている。しかし、これまでの研究では、属性表現の意味の創造的な拡張にかかわる分析は本格的にはなされていない。本研究は、日常言語の属性表現（特に、形容詞類、形容動詞類）にかかわる言語現象の体系的な記述と綿密な分析に基づいて、言語主体の身体性を反映する属性表現の意味解釈のメカニズムとメタファー、メトニミー、焦点シフト、等の認知プロセスを反映する意味拡張のメカニズムの解明を試みている。

言語科学の視点からみた場合、本研究は、次の点で今後の意味論の研究への新たな枠組みを提示している。すなわち、本研究は、従来の客観主義的な世界観に基づく意味論（特に、語彙意味論、概念意味論、真理条件的意味論）における属性表現の研究の限界を明らかにし、主体と外部世界との相互作用の経験に根ざすより包括的な意味論のモデルを提示している。

また、新たな属性表現の意味論を構築するにあたり、環境の持つ意味がそこで活動をする人間にとってどのように利用され意味づけられるかを考え、属性をつねに主体と対象の相互作用的な属性として分析する研究の枠組みを提示している。

本研究は、共時的な観点からみた言葉の意味理解のメカニズムに関する研究であるが、この研究成果は、通時的ないしは歴史的な観点からみた意味変化の研究への基礎的研究としても注目される。これまでの意味変化の研究は、名詞類と動詞類の一部を中心とする、意味の特殊化と一般化に関する記述的な分析が主眼となっているが、言葉の身体性を反映する形容詞類の意味変化のメカニズムの体系的な研究は試みられていない。本研究で明らかにされた共時レベルの意味拡張のメカニズム（特に、メタファー、メトニミー、焦点シフト、等の認知プロセスを反映する形容詞類の共時レベルの意味拡張のメカニズム）は、通時レベルにおける意味変化の要因を明らかにしていくための一つの検証の場を提供する。また、これまでの言語習得の研究では、動詞類や名詞類の言語表現の習得過程の研究は進んでいるが、形容詞類、形容動詞類に代表される属性表現の習得過程の研究は殆どなされていない。本研究は、言葉の意味の獲得過程と言葉の創造性の解明を図る言語習得と認知発達に関連分野の研究への基礎的な研究としても重要な役割をになう。

本申請者が所属する環境情報認知論講座の目的の一つは、言語、知覚、思考、推論、等にかかわる人間の知のメカニズムの解明にあるが、本研究は、この目的に沿った基礎的研究として高く評価できると共に、今後の言語学と認知科学の関連分野への貢献がさらに期待される。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成16年12月17日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果合格と認めた。